

鹿児島県指宿市における戦跡考古学の現状と課題

新垣 匠（指宿市役所）

はじめに

鹿児島県指宿市は本土最南端ということもあり、太平洋戦争期において指宿海軍航空基地や摺ヶ浜平射砲台など陸・海軍によって海岸線沿いに軍事施設が建設され、現在もその痕跡を辿ることができる。

戦後 78 年を迎える、戦争経験者が減っていき、その悲惨さを語る人の減少が懸念される中、現在も残っている戦跡をどのように未来の世代に伝えていくのか大きな転換期を迎えており、本論では、指宿市に残っている戦跡について既往の調査や研究などの現状を整理し、未調査・未解明部分などの今後の課題を検討していきたい。尚、本論における戦跡考古学の対象時代はすでに触れているとおり、太平洋戦争期（1941【昭和 16】年～1945【昭和 20】年）としたい。

1. 指宿市における戦跡考古学研究

指宿市は 2006（平成 18）年に旧山川町・開聞町・指宿市の 1 市 2 町の合併によって誕生した自治体であり、太平洋戦争期の記録についてはほとんどが機密文書として焼却されたと考えられているが、概略的な記録としては、指宿市誌・山川町史・開聞町郷土誌に記録されている。

指宿市誌（1985）では、空襲の罹災記録や本土決戦に備えた基地である指宿海軍航空基地などが記されており、基地が建設された経緯や建設に伴って移転を余儀なくされた田良地区の人々についての記載もある。指宿海軍航空基地があった田良浜は、知林ヶ島との間に砂洲ができることで有名だが、台風の時期になると太平洋戦争期の航空機の残片が打ち上げられることがある。

開聞町郷土誌（1994）では、軍事施設の建設は行われていないが、昭和 20 年（1945）8 月 11 日の空襲によって川尻地区の家屋 700 戸のうち 492 戸が罹災したという記録が残されている。特に開聞町では本土攻撃の際は開聞岳を目標にされており、戦闘機の往来が激しかったという。

山川町誌（2000）では、土矢倉に山川港防衛のため高射砲陣地（山川平射砲台）があったとされており、浜児ヶ水の地下壕では海軍の震洋隊（第 53 震洋隊）がその出撃を待っていたと記載されている。そのほか、1945（昭和 20）年 6 月には山川国民学校の生徒 5 人が機銃掃射の犠牲となり、8 月 9・11 日には山川港を中心に焼夷弾が落とされ、火の海となったという。

以上が郷土誌によって取り上げられている太平洋戦争期の記録であるが、ほとんどが概略のみに留まっている。

調査・研究については 21 世紀以降になって少しづつ行われるようになる。平成 13（2001）年、近代化遺産調査の一環で旧指宿市において防空壕の調査が行われており、74 カ所の防空壕が確認されている（中摩 2020）。

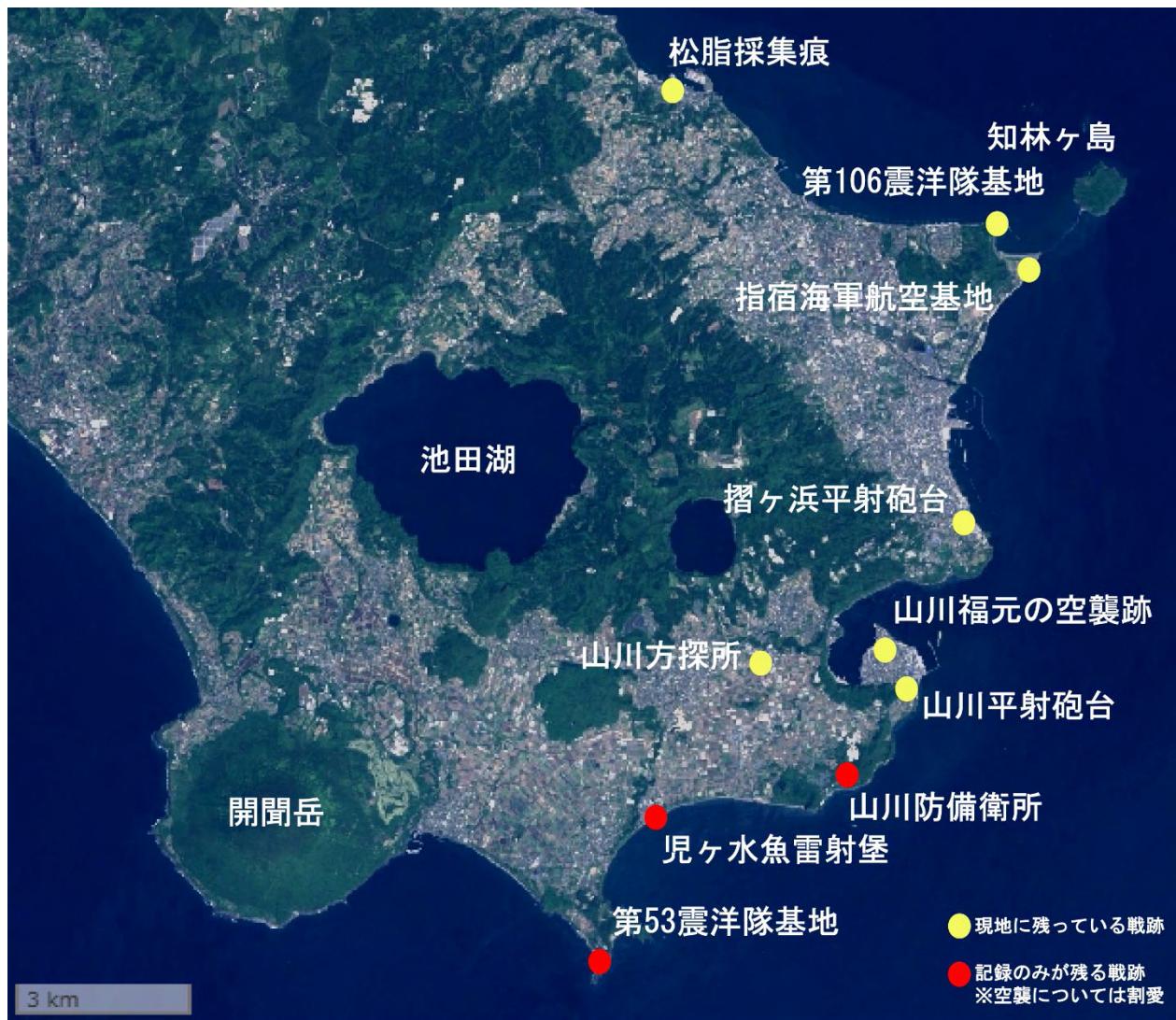


図1 指宿市に残る戦跡（地図は国土地理院地図を使用）

筆者は市民の方が発見された航空機の残片を知覧特攻平和会館学芸員の八巻聰氏のご協力のもと、太平洋戦争期の零戦の修復に携わったことのある陸上自衛官の中村泰三氏に鑑定していただき「二式飛行艇（二式大艇）」の可能性があるとの指摘をいただいた（新垣 2021）。指宿海軍航空基地には、太平洋戦争期に指宿沖に飛行艇と思われる航空機が写真に残されており、この航空機の残片は、実際に航空機が基地内に駐機していた証拠となる可能性が非常に高い資料である。

本市は海に面していることから、本土決戦に備え、海岸沿いに多くの軍事施設が建てられたが、その影響もあり、米軍からの空襲を度々受けている。その空襲の痕跡が現代にも残されていないか調査を行った中摩浩太郎は、山川福元に山川石で作られた石垣に空襲の痕跡が残っていることを確認した。また、指宿海軍航空基地跡に建てられた国民休暇村キャンプ場には、空襲のためにできた窪みがそのまま整地されたため、空襲の痕跡（爆弾址）が現在に留まっていることも推察している（中摩 2021）。

また、中摩は同じ論考で本市元文化財保護審議会会長の岩崎裕氏から聞き取り調査を行い、岩崎氏

が今和泉小学校裏の「隼人松原」において、太平洋戦争期に松脂採集をおこなっていた情報を得て、現地で採集の痕跡を確認している。

以上が、本市における戦跡考古学研究の概要である。多くは郷土誌などによる概略のみに留まっており、いずれの文献においても文化財についての項目ではなく、戦災として取り上げられている。戦跡についての具体的な調査・研究については中摩によるもののみであり、発掘調査の事例も行われていないのが現状である。次節では、本市にある戦跡の現況について紹介する。

2. 本市に残っている戦跡について

(1) 指宿海軍航空基地

本市で最も大きい軍事施設である指宿海軍航空基地は、1942（昭和17）年5月から1943（昭和18）年春にかけて、海軍水上機基地として建設された。基地の付帯施設として潟口海軍官舎も同時に建設され、飛行場の完成を待たずに1943年5月には水上機の発着が開始された。しかし、飛行場兵舎の完成を待たずに、1945（昭和20）年5月5日の空襲によってほとんど消失してしまっている。

現在、基地跡は休暇村指宿の園地とエコキャンプ場となっており、外見が残されている戦跡は指揮所跡・爆弾址のみとなっている。ただ、現在でも航空基地のエプロンや小型機のスベリとみられる基礎部分が現地付近に残されている。

また、基地近くの田良岬では、基地に駐機していたとみられる航空機の残片が打ち上げられることがある。指宿海軍航空基地の関連する写真には、海上に駐機する飛行艇が写っており、この場所に実際に飛行艇が駐機していたことを裏付ける可能性のある資料である。

(2) 第106震洋隊使用の滑走用コンクリート土台・震洋艇格納庫

本土決戦に備えるため1945年3月から海上護衛の強化と共に水上・水中の特攻部隊である特攻戦隊の編成が開始され、鹿児島県下には27ヶ所設けられた。本市にも指宿基地の第106震洋隊と長崎鼻基地の第53震洋隊が配属された。隊番号が1～2桁の隊は1人乗りの1型震洋艇、3桁の隊には2人乗りの5型震洋艇が配備された。

実際に配属された隊員数などは不明であるが、現在は、第106震洋隊の震洋艇格納庫及び運搬用のコンクリート土台は現在も残されている。コンクリート土台については干潮時になると、その姿を現す。第53震洋隊について現地に残っているものについては未調査であり、詳細は不明である。

(3) 摺ヶ浜平射砲台・山川平射砲台

本土決戦に備え、指宿市内に2ヶ所（摺ヶ浜・山川）に陸上からの艦船撃破を目的に設置された海軍砲台であり、鹿児島県では10ヶ所設置されている。摺ヶ浜には15糰、山川には12糰の加農砲が2門設置された。なお、摺ヶ浜平射砲台には、水上射撃電探班も伴っていた。両砲台ともに錦江湾を正面に望む立地であり、コンクリート製の砲台であるが、実際の内部の状況や大きさ・幅などについての寸法は未調査であり、詳細については不明である。現在も現地に残されている。



震洋艇滑走用コンクリート製土台



震洋艇用格納庫



摺ヶ浜平射砲台



山川平射砲台



山川方探所



松脂採集痕



田良岬採集の航空機残片

図2 本市の戦跡



図5 山川福元の空襲範囲と変色石塀位置（左）及び変色石塀の写真（右）
(中摩 2020 より転載)

（4）山川方探所

指宿海軍航空基地建設に伴い、1943（昭和18）年に海軍電波送信所として設置された。コンクリート製防空壕の地下15mに海軍の通信施設が置かれたとされている。方探所は終戦後、電波庁の所管となり電波観測業務が行われ、現在は国立研究開発法人情報通信研究機構山川電波観測施設として利用されている。現在も現地に残されているが、実際の内部の状況や大きさ・幅などについての寸法は未調査であり、詳細については不明である。

（5）児ヶ水魚雷射堡

本土決戦に備え、海軍によって設置された施設であり、陸上から魚雷を発射して敵艦隊を攻撃する目的で設置された。現地には射堡跡が残されていないとされているが、付近の調査を行っていないため、詳細は不明である。

（6）山川福元の空襲跡

昭和20年8月11日の空襲によって、山川福元の一部が焼失した。詳細については、中摩（2021）の論考に譲りたいが、空襲当時、山川福元には現地付近でとれる良質な石材である山川石でつくられた石塀が設置されており、戦火を浴びた石塀は変色したとの証言が残っている。戦後、区画整理が行われたが、現在も変色した石塀が残されており、空襲被害が報告されている範囲と変色した石塀の範囲がほぼ一致していることが分かっている。

（7）防空壕

太平洋戦争期では、敵軍からの空襲に備えるため、多くの防空壕が各地でつくられたが、軍がつくったものから個人・集落でつくられた手掘りのものまで多種多様にあるため、現在ではいくつあるか

表1 県内で確認されている防空壕

市町村名	数	市町村名	数	市町村名	数	市町村名	数
鹿屋市	465	奄美市	27	湧水町	10	屋久島町	1
南九州市	120	出水市	26	さつま町	8	十島村	1
南さつま市	105	曾於市	25	宇検村	7	知名町	1
鹿児島市	89	阿久根市	25	枕崎市	6	東串良町	0
霧島市	84	喜界町	22	龍郷町	6	三島村	0
日置市	77	姶良市	21	徳之島町	5	大和村	0
指宿市	74	南大隅町	13	大崎町	4	天城町	0
長島町	63	錦江町	13	中種子町	4	伊仙町	0
垂水市	56	薩摩川内市	12	伊佐市	3	和泊町	0
肝付町	56	志布志市	11	南種子町	3	与論町	0
いちき串木野市	35	瀬戸内町	11	西之表市	1	合計	1490

把握できない状態である。

なお、2000年代の県内では、2005（平成17）年4月、鹿児島市内で戦時に使用されていたと思われる防空壕で遊んでいた中学生4人が、一酸化炭素中毒で全員が死亡、2000（平成12）年6月、鹿屋市で県道の拡幅工事中に発生した防空壕陥没事故で女性が死亡している。

戦時中につくられた防空壕による事故が相次いだため、防空壕の現況を把握し、それぞれの支援制度を通じて災害を未然に防止し安全対策を推進するため、国（国土交通省、農林水産省及び林野庁）において、全国に現存する防空壕の実態調査が行われている⁽¹⁾。

令和4年度に国土交通省、農林水産省及び林野庁が行った実態調査によれば鹿児島県は1,490カ所確認されており、全国で1番多い。防空壕が多い要因としては、本土防衛の最前線に位置していたため軍事施設等が集中し、敵軍の空襲を頻繁に受けたことが挙げられる。本市で74カ所確認されている。数の多い自治体については航空基地のある場所が多く、敵軍による空襲に備えて掘られたものと考えられる。

なお、鹿児島県内の防空壕は2013（平成25）年度は1,735カ所、2017（平成29）年度は1,700カ所とその数を減らしている。本市でも旧指宿市で2001（平成13）年に調査が行われており、74カ所確認されている。旧山川町・旧開聞町の数については把握できていないが、現在は指宿・山川・開聞合わせて74カ所ということであるため、県内の傾向と同様に減少している状況と思われる。

（8）松脂採集痕

本市で分かっている松脂採集痕は、今和泉島津家本領本宅が置かれた犯跡において松林が整備されており、現在は「隼人松原」と呼ばれている場所で確認されている。詳細については中摩の論考（中摩2021）に譲りたいが、隼人松原における松脂採集の方法は、福岡県福岡市西南学院大学構内や千葉県市川市など全国各地にあり、当時統一規格に沿った松脂採集が行われていたことを物語る貴重な資料である。

3. 本市に残されている戦跡の現状及び活用について

(1) 現状

現在、本市に残されている戦跡の数は 10ヶ所であるが、いずれも詳細な調査を行っていないのが現状である。本市以外では、知覧飛行場跡がある南九州市、海軍出水航空基地跡のあった出水市、瀬戸内町などで戦跡の詳細な調査が行われており、鹿児島県による調査も行われている。県内では発掘調査中に太平洋戦争期の遺物や遺構が確認されることがあるが（知覧町 2006・鹿児島県 2000）、本市では確認されている事例はない。

また、本市では太平洋戦争期に関わる戦跡を指定文化財に指定している戦跡は一つもない。県内では3市1町で 15 件が国・市指定もしくは国登録有形文化財に指定文化財に指定されている。旧知覧町（現：南九州市）が「旧知覧飛行場給水塔」を、1978（昭和 53）年に町指定文化財（現：市指定文化財）に指定されている。知覧飛行場跡の現状と課題についてまとめている上田耕・坂元恒太・大山勇作によれば、太平洋戦争期の遺跡を対象とした戦跡の文化財指定については、沖縄県南風原町が指定して沖縄陸軍病院南風原壕が知られているが、南風原町の指定は 1990（平成 2）年であり、全国的にみても、かなり早い段階に指定された戦争遺跡であると評価している（上田・坂元・大山 2019）。

(2) 活用

本市では、博物館に所属している学芸員に各小中学校や老人会から講演会の依頼が度々届くが、その中に「戦争」について話してほしいという依頼もあり、本論で取り上げている本市の戦跡について紹介をしている。また、フィールドワークにおいても実際に現地に行くことによって、本市に実際に戦争の痕跡が残っていることを実感してもらっている。

また、文化庁の「地域と協働した美術館歴史博物館創造活動支援事業」を活用し、指宿まるごと博物館構想推進実行委員会を中心に本市で起きた太平洋戦争期の出来事や施設を、当時を生きた人々の証言と資料をもとに、「指宿の戦跡を訪ねて～今伝えること～」という映像・冊子を制作している（指宿まるごと博物館構想推進実行委員会 2013）。

4. 本市における戦跡考古学の課題

本市における戦跡考古学については、ほとんどの戦跡において詳細な調査ができておらず、指定文化財も一つもない状況である。戦後 78 年が経ち、戦争経験者が減り、語り継ぐ人も減っている。そうした中で、今もなお残る戦跡について詳細な調査が必要である。また、防空壕が減少しているように、開発行為などによって知らずのうちに、戦跡が減っている可能性がある。こうした事態を防ぐためにも、戦跡についての詳細調査を行い、後世の世代に確実に伝えていくために、指定に向けて取り組む必要がある。

また、戦跡以外にも戦没者を祀る慰霊碑も本市には少なくとも 20ヶ所はあるとみられる。慰霊碑について、パプアニューギニア地域の事例を紹介している中山郁は、戦友や遺族の高齢化によって参拝者が減少していることから、村によってはもはや守る意味のないものとして放置、あるいは破壊さ

表2 県内で調査された戦跡及び発掘調査中に太平洋戦争期の遺物が確認された遺跡

所在地	遺跡名	報告書	備考
鹿屋市	中原山野遺跡(西原掩体壕跡)	鹿児島県教育委員会1990	掩体壕跡の調査
		鹿児島県立埋蔵文化財センター2007	防空壕跡が検出・薬莢が出土
南九州市	知覧飛行場跡	南九州市教育委員会2015/2016 鹿児島県立埋蔵文化財センター2017	
	知覧城跡	知覧町2006	空堀跡から太平洋戦争中の出土
霧島市	菩提遺跡	隼人町1998	太平洋戦争期の爆弾坑7基検出
	上野原遺跡(第10地点)	鹿児島県立埋蔵文化財センター2000	2基の探照灯跡が検出(海軍施設関連)
出水市	旧海軍出水航空基地 掩体壕	出水市教育委員会2014	
瀬戸内町	佐世保海軍軍需部大島支庫跡	瀬戸内町教育委員会2017・2022	
	西見砲台跡		
	安脚場砲台跡		
	手安弾薬本庫跡		
	第18震洋隊基地跡		
	大島防備隊本部跡		

表3 県内で指定文化財に指定されている戦跡

番号	市町村名	指定名称	指定日	内容
1	南九州市	旧知覧飛行場給水塔	S53.5.11	市指定
2		旧知覧飛行場油脂庫	H27.2.17	
3		なでしこ隊「特攻日記」	H27.7.21	
4		知覧特攻戦没者の手記	H27.7.21	
5		陸軍四式戦闘機「疾風」(1446号機)	R2.11.17	
6		佐世保海軍通信隊頸娃分遣隊地下壕跡	R4.3.15	
7		旧陸軍知覧飛行場 防火水槽	H19.7.31	国登録
8		旧陸軍知覧飛行場 弾薬庫	H19.7.31	
9		旧陸軍知覧飛行場 着陸訓練施設鎮碇	H19.7.31	
10	鹿屋市	海軍航空隊笠野原基地跡の川東掩体壕	H27.7.26	市指定
11		海軍航空隊串良基地跡の地下壕電信司令室	H27.7.26	
12	志布志市	権現島水際陣地跡	H19.10.22	市指定
13		西馬場の岩川海軍航空隊基地通信壕跡	H31.3.27	
14		平床の通信壕跡	H31.3.27	
15	瀬戸内町	奄美大島要塞跡	R5.3.20	国指定

れているという（中山 2011）。本市においても、慰霊碑に込められた意思を継ぐのは誰なのかも課題になりつつある。

おわりに

今回、本市における戦跡考古学の現状と課題についてまとめることで、県内の他自治体と比べ、戦跡についての調査が遅れている現状を再認識することができた。活用の部分においては、講演会やフィールドワークなどで戦跡を紹介し、実際に本市に軍事施設が建てられており、78年前では戦争が身近にあったということを実感させている。戦争という「負の遺産」の研究を行うのは難色を示される場合が多いが、「負の遺産」であるからこそ、きちんと詳細な調査を行い、未来の世代に伝えていかなければなければならない。

私自身、父方の祖父の父親と弟、祖母の兄と妹を沖縄戦で失っている。沖縄考古学会の元会長である當眞嗣一氏が『戦争遺跡を再び「つくりない、つくらせない」ために戦跡考古学を深化、発展させていくことが強く求められているように思われる』（當眞 2022）と述べられているように、もう二度と同じような惨劇を繰り返さないよう、今後も調査・研究を続けていきたい。

註

1 国では現在、戦時に旧軍、地方公共団体、その他これに準ずるものが築造した防空壕・防火水槽を「特殊地下壕」と呼称している。実態調査については「国土交通省の令和4年度特殊地下壕実態調査結果について」を引用
URL : https://www.mlit.go.jp/toshi/toshi_tobou_fr_000015.html (最終閲覧日 : 2023/09/10)

参考文献

指宿市 1985 『指宿市誌』

指宿まるごと博物館構想推進実行委員会 2013 『指宿の戦跡を訪ねて～今伝えること～』

開聞町 1994 『開聞町郷土誌改訂版』

菊池実 2011 「戦争遺跡の調査研究を考える」『季刊考古学 戦争と慰霊の考古学』第 116 号 pp14-21 雄山閣

上地克哉 2011 「沖縄県南風原町の戦争遺跡」『季刊考古学 戦争と慰霊の考古学』第 116 号 pp22-25 雄山閣

上田耕・坂元恒太・大山勇作 2019 「知覧飛行場跡における戦跡考古学の現状と課題」『知覧特攻平和会館紀要』第 1 号 pp30-38

當眞嗣一 2022 「沖縄の考古学」『第 1 回日本災害・防災考古学会研究会資料・予稿集』pp165-172 日本災害・防災考古学会

抜水茂樹 2006 「戦争遺跡に関する考察」『縄文の森から』研究紀要・年報第 4 号鹿児島県立埋蔵文化財センター pp45-54

抜水茂樹 2020 「鹿児島の戦争遺跡について」『かごしまの考古学（デジタルコンテンツ）』鹿児島県立埋蔵文化財センター

中摩浩太郎 2020 『指宿の戦跡～戦後 75 年～』令和 2 年度 生涯学習講座 もっと知ろう！ふるさと学 第 3 回資料

中摩浩太郎 2021 「令和2年に実施した戦跡（空襲遺構）調査について」『博物館年報・紀要』第14号 指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれ

中山郁 2011 「慰靈の考古学」『季刊考古学 戦争と慰靈の考古学』第116号 pp80-84 雄山閣

藤井紀之 2008 「鹿児島県鹿屋の防空壕陥落事故と土木工事との関連」『地質ニュース』650号 pp26-35

山川町 2000 『山川町史 増補版』

八巻 聰 2012 「第百四十六師団（護南兵団）について」『南九州市 薩南文化』第4号 pp125-145

八巻 聰 2016 「鹿児島の本土決戦準備」『鹿児島考古』第46号 鹿児島県考古学会 pp5-14